

●「文学岩見沢」(北海道) 75・76・77号

「文学岩見沢」は地味だが手堅い雑誌で、詩や俳句、短歌、川柳も掲載する多人数のわりにチームワークの良さが感じられる誌面である。このなかで樽井英介氏はストーリーテラーの才能を遺憾なく発揮している。

75号の「夜の湖」、76号の「川湯温泉」、77号「風のない街で(二)」はどれも、読者を引き込んで物語の流れに巻き込んでいくストーリーの豊かな創作力を示している。「川湯温泉」はタイトルは一見地味だが、

時を隔てて会った同級生の背後に隠されていた詐欺罪とその妻との決別が、物語を短編にもかかわらずダイナミックに動かしている。主人公が検事であるのもよく、またこれからロシアへ逃亡していくという設定も

いい。好短編である。また「風のない街で」も妻の突然の失踪を描いていて、スリリングで鮮やかな筆致が物語をぐいぐい牽引していく。これは(一)なので、

これがどのような展開を見せるか、読者に大きな期待を持たせる。特に女性がどの作品も生きている。それぞれ個性を持った性格の描き分けがしっかりできていて、血肉が通っている。半年に一篇これだけのものを発表できるストーリーテラーとしての力量は相当なもので、場が与えられれば、北海道の作家として楽しみを寄せる読者もたくさんできるのではないだろうか。読者を引き込んでいくその筆力は注目すべきものがある。

清水谷のぶ子「秋の公園」、反町涼子「時空の森」

からも手堅い造形力を見せてがんばっている。

●「殺雨」(東京都) 3号

「招待状」(折口真)は、場末の酒場の雰囲気は主人公のママの過去や内面を追いながらよく醸し出されている作品だが、出て行った夫が突然帰ってくるそこに、激しいものや衝突がないので、味が薄くなってしまう。貧困や落ちぶれる運命には、逆にあるエネルギーが鬱積していくはずであり、そのマイナスの感情が夫に対して放出されていくはずの部分が書かれてい

ないので、結末が特に物足りない。

「人情に触れた時代」(福本安廣)は自分の青春時代を振り返った文章だが、タイトルどおり温かみの感じられるふくよかな世界がひろがっている。そのふっくらしたぬくもりがいい。

「中出しの女」(マツイアキラ)に登場する女性は個性的なキャラクターで活気がありおもしろいが、結末の殺人事件はやりすぎ。世界が一挙に崩れる。

故河林満が指導していた同人誌だが、フィクションとしての精練度がほしい。皆でがんばって表現力を鍛え合ってもらいたい。

●「あるかいど」(大阪府) 36号

「あるかいど」はデザインもよく、読みやすい活字で、ボリュウムも二〇〇ページを超えている。同人も多く、充実している。

「埋める」(佐伯晋)は飼いの犬の死と自分の老いによる歯の抜け落ちるのを交互に重ねて死と時間とを眺める味わいは、快いテンポに乗った文章で、読ませる。この文章の味わいは一つの力量であり、身についたうまさを感じさせるが、もう一つ読後胸に残らないのは、死との向かい合いが切迫感を持っていないせいだろう。もつと死と直接向かい合い、抜きさしならぬ命の現実として、歯の抜け落ちを予兆として自覚したなら、さらに胸に切り込んでくる好短編になっただろう。惜しまれる。

「奪う」(細見牧代)

は、カナダの混血インディアンに嫁いだ日本人妻の視線を通して鹿をハンティングする夫の感情と自分の感情の揺れを描いている。夫ジェフが鹿を撃つ銃の引き金の指の震えやその緊張が喜びに変わるところなどはよく書かれている。男の本能的な喜びと逆に傍観者として生き物を殺すうしろめたさは、よく伝わってくるが、もう一つ差し込んでこないのは、テーマに対する具体的な実感が乏しいからだだろう。もう一つこのテーマを取締らせていないのは、インディアンの問題や国際結婚や銃の所持の問題など日

本の常識を破る異社会の問題が小説の材料としてゴロゴロしており、それをどう扱うか処理しあぐねているからでもある。腰を据えて、一つ一つの問題としつかり取り組んでいくことで、もつとよくなり、もつと鉄脈が広がっていく可能性がある。現代の日本の閉鎖状況を打ち破るものはこうした異社会から提示されてくるもので、これが逆に日本の底に潜むものを呼び起こしてやるはずである。たいへんだが、これらとしつかり取り組み、表現していつてほしい。

●「文学街」(東京都) 253号

「文学街」は全国同人雑誌作家協会の伝統を引き継いで主宰の森啓夫氏が続ける月刊誌。

今号は森崎房枝氏の「罅の中」が傑出している。トック事故で下半身麻痺になり足はしかし激痛に襲われる長期入院中の「俺」と、精神を病む付添婦との心の共鳴の物語である。病院の、一人一人が命と向かい合う暗く重い気配は濃厚に伝わってくる。傷病の痛苦や瘡癩の腐蝕感に責め苛まれながら、肉体の苦しみの音を聞いている日常は、生存の根を浮かび上がらせる。それが分裂症のさくという女性の病の危うさと深い底で共鳴し、命の融和として溶け合っていく結末は、重厚な読後感を残す。ここに聞こえる肉体の苦しみの音は、作者の長い闘病生活に裏打ちされたもので、主人公だけでなく、病院で闘う無数の命の苦しみの声として集合してくるものである。命の呻きの重みと、その救済に迫る造形は、筆者の並々ならぬ才能を見せている。昨今の芥川賞作品よりもはるかに読み応えがある。命の刻印を残す作品として優秀作に推挙したい。

●「青森文学」(青森県) 76号

「青森文学」はそれぞれがのびのびと自由に書いている。ジャンルも広々としている。小説と詩と随筆以外に新短歌、叙事詩、戯曲もあり、イベントの報告も楽しめます。ただ、この自由さの中に、反戦や反軍国主義の一貫した姿勢も強く感じられる。

戯曲の「津軽は吹雪―相沢良―」(まさきすすむ)

は金融恐慌の嵐のさなかの労働者を救おうと立ち上る女性が逆に官憲に捕えられ、殺されていくドラマを描いている。

また叙事詩「回想／現人神『昭和天皇裕仁』考」(谷村茂夫)は徹底した昭和天皇の戦争責任を追及している。ここまでやると右翼の言動も心配になるくらい鋭い迫り方だが、思い切った言及はむしろさわやかさも感じさせる。

巻末の「十五年戦争下の青春7」(米谷正造)は珍しい特攻隊の訓練生の内部からの記録である。体当たりの侵入訓練や、燃料が尽きて、しだいに訓練も制約されていく経緯や、性教育などは記録として重要である。敵艦目標が女性性器の形そっくりで、最初ひどく動揺する心理や隠語などの記述はリアリティがある。こうした重要な記録を掲載しているところに、このグループの一つの理念が感じられる。

●「飛行船」(徳島県) 3号

竹内菊世主宰によるこの同人誌は、なかなかの野心作が見られる。「水葬―永昇丸沈没―」(斎藤澄子)は、アメリカの原子力潜水艦と民間船の衝突事件を扱った作品で、こういう素材を直接小説にした勇氣は注目している。昨今お目にかかれない題材である。原子力潜水艦と民間船の衝突にはいくつものタブーが潜んでいる。まず、原子力潜水艦はもともと隠密行動であるところに核兵器の奇襲が成立する前提条件がある。やすやすと自らの所在が知られてしまうようではその隠密性崩れてしまう。民間船と衝突すること自体、自らの姿を現してしまうことになり、ここに第一のタブーがある。また原子力潜水艦は当然原子力で動いており、これが衝突によって核燃料などが海に漏れると環境問題にも大きな影響を引き起こすので、きわめて面倒な事態になる。これが第二のタブーである。さらに軍艦と民間船が衝突するということは、本来あっては成らないことで、民間を守るために存在する軍艦の本質的な意義を問われることになる。また最先端のレー

ダーや探知機を装備しているはずの原潜が周りにまったく気づかなかったという落ち度もあってはならないことであり、このように簡単に接近ができるということと自体が問題になる。さらに、日本には核兵器は存在しないという建前になっている。原潜がこのような日本の小型民間船が往来しているところを航行しているということも大きな問題になる。日本の近海を水爆のような大型核兵器が日常的に往来しているとすれば、日本の近海がどうして核攻撃の目標にならないのか、恐るべき現実を容認することになる。

タブーだらけの事故をアメリカ海軍ならびに国防総省が隠蔽したいと考えるのは当然で、この工作の犠牲になった人々を斎藤澄子氏の小説はかなりきわどく描いている。素材への着眼はすばらしい。しかし、この筆致で問題の底を掘り当てるのはむずかしい。現実の一端は噛み取ることではできても、その根本を抉り出すことは至難の業である。もし成功するとしたら、もっと長い長編の推理小説にならざるを得ないだろう。物語として展開するならば、ロシア海軍や大使館、中国海軍や領事館も絡んでくるはずである。また原潜という核兵器を搭載した艦船がどのように現在の危うい世界平和のバランスを取っているか、その本質にも迫らざるを得ない。またそれを担い、行動する人物がこの小説には何人か必要になる。そのダイナミックな人物も造形しなければならぬ。さらにこのクライマックスは世界の破壊と隣接しているだけに、大きなカタストローフが待っているかもしれない。ここまで筆を進めて初めてこの作品は小説として成立し得る。とほうもない素材であると同時に、とほうもない筆力と努力を要求するものであることは認識させるを得ない。敢えて挑戦してほしいが、成功の確率は低いきわめて困難な作業であることは付言しておきたい。斎藤氏はすくなくともその入口に立ったという功績は認めたい。世

それだけのことを行なう力の背景には、一発で数百万

人が死ぬという現実が動いていることは、現代人として頭に入れておいていいと思う。

「桜芯降る」(竹内菊世)は同僚との恋が妊娠を経て相手の突然の死で終わる、しつとりとした味の残る好短編である。文章に細やかな手触りが感じられ、積み重ねられた確かな手腕が感じられる。

「宮内鳩彦の詩友たち3―早逝した叙情詩人・高原薫勇2―」(松崎慧)も足が地に着いた文章で、地方の詩人を扱って筆にぶれがない。身近な素材を的確に飾らずに書いている姿勢に文化の根を感じる。

●「季刊午前」(福岡県) 39号

いつも斬新な企画編集をする「季刊午前」だが、今号はオーソドックスなスタイルをとっている。小説も一作一作に重みが備わった。「ここにおる」(野見山潔子)は、タイトルに句点を使うのは、今風に追随するものかやや斜めに読み始めたが、読み進めるうちに軽いスタイルから実感の重みに裏付けされた流れにいつのまにか引き込まれ、母への深い追懐と自身の人生の振り返りとがしつかり重なって、生きている空間に自然に巻き込まれた。句点にそれなりの必然性があり、安易さは払拭された。死んでなお生きている母性の存在が自身を導いていく生の道行きを浮かび上がらせる点で、この小説は成立し、成功している。後味もいい。いい作品である。

連載の「長崎、さんた丸や 余間」(加茂宗人)もいつもながらの緻密な追跡で、息の長い筆には敬服する。他にも注目している人がいると思う。

●「ちば文学」(千葉県) 3号

全体に時間に追われているのか、短い断片的な作品が多い中で、玉田晃平氏は自分の世界をしつかり築いている。「水面に浮かぶ月の光の破片。あるいは彷徨う舟」という長いタイトル。斬新で、雰囲気は出ているが、的確かどうかはもう一つの感がある。しかし内容は、独自の感性がよく出ている。出て行ったまま戻らない同棲者の女性をぼんやり待つ主人公の青年に、

高校時代の頭のいい転向生の記憶が浮かび上がってくる。転校生はクラスのリーダー格の女性を冷たく犯す。再びアパートで失踪者を待つ時間の中で、テレビにハイジャックの事件が映る。主犯が転校生の名前と同じで、共犯者が犯されたリーダーの女性と同じである。

アパートで自転車がなくなくなり、失踪していた同棲者が帰って来たような気配があるが、すれちがいか、まだ会えない。日常のおぼろさとテレビの事件の映像の曖昧さとがうまく重なり、日常と非日常とが奇妙に交錯する。このぼんやりとしたねじれがうまく書けている。これまで何度かこの作者の作品を読んでいるが、いい才能を感じる。実際に大きなものにぶつかっていくともっと世界が拡大し、作品もダイナミックに動いていくだろう。作家は決意である。

●「九州文学」(福岡県) 525号

四〇〇ページの堂々たるボリューム。これほど層の厚い同人雑誌はそうはないだろう。七〇周年記念作品の「青狐の賦―火野葦平の天国と地獄―」(暮安翠)は力作。火野葦平の評伝は足跡をよく辿っていて重みがある。文章がやや荒いのが気になるが、これほど詳細な内容のものはないだろう。3回合わせていずれ一冊の本になるだろうが、戦前と戦中、そして戦後の平和の三つの時代を歩んだ時代の寵児を捕え直すことは、不況に喘ぐ現代においても重要な意義を有することと思う。一つの功績である。

●「京浜文学」(神奈川県) 12号

ノンフィクション「地の果て西アフリカを目指して(四)」(木村為蔵) はやはりおもしろい。西アフリカにおいてはイスラム教やユダヤ教が混在していること、ガーナには紀元前からの長い歴史があること、また砂金と塩とを交換していたことなど、興味深いことが次々に展開する。またイスラム教徒の礼拝の順序や体の浄め方など図式入りで紹介されているのも新鮮である。また一九五〇年代に石油ランプの大量販売というのもおもしろい。暗黒大陸と呼ばれるアフリカに

のように先駆的な商社の活動を開拓していた人物ならではの文章である。最後まで書き切るのはいへんな作業と思うが、ぜひ御高齢のお体を大事にしながらいり遂げていただきたい。

同じノンフィクションの「雪解風―関東大震災の思い出(四)―」(神谷量平) も価値ある記録である。筆者は、大地震を利用して行なわれた官憲や軍による一連の「ひじょうに汚い事件」に焦点を当てている。

「私は関東大震災に何故? という視点で、その前後の『大正デモクラシー』が脅威となった帝国軍隊の弱点にふれて、その後の歴史とどう関係していくのか、考えて見ようと思っております」とあり、関東大震災の混乱に乗じて行なわれた軍によるテロがその後の軍国主義に傾いていく日本を象徴していたことを見つめていく。亀戸事件は平沢計七など労働運動家が、大震災のドサクサに紛れた混乱の中で、九月三日亀戸署に連行され、その深夜から未明にかけて、習志野騎兵第十三連帯五中隊の白色テロによって惨殺された事件である。筆者は大震災で同時に行なわれた朝鮮人の虐殺も連動している事件と見、当時朝鮮でも高まっていた独立運動の弾圧として行なわれたとする。「日本の軍隊は朝鮮人と共に社会主義者もまた怨敵として虐殺しても差し支えがないという習慣を、はつきりとこの関東大震災の際から開始していたことを示しています」。

亀戸事件はさらに「大杉栄事件、虎ノ門事件、そして和田久太郎の福田大将狙撃事件」と続いていく。「亀戸事件」も、「大杉栄事件」も、「和田久太郎」も、みな命を張って、何十年も前から、今次世界大戦による敗北を阻止していたのだ、という歴史認識もあっていいのではないだろうか」という論は、ある意味で鋭く本質を突いている。共産主義への弾圧は軍国主義の足音とともに大きく激しくなり、ついに戦争という悲劇に飛び込んでいく。その端緒が、確かに関東大震災の中にすでに見られることは、卓見である。神谷量平氏自身の内質をも披露する文章で、鮮やかな血潮が通

っている。こういう文章によって、人は大事なことを伝え、また伝えられていくと思う。

●「ぼさーじゅ」(大阪府) 20号

記念号であるこの号は二五〇ページを超える厚さだが、どちらかというと洒落た軽いものが多い。やや読み応えがないかと思っていたら、巻末の「狂風に消えた金塊」(松岡沙鷗)には驚いた。今回だけで二五〇枚を超えるボリュームで、まだまだ長く続きそうな気配がある。この筆力と、扱う素材の大きさはただ者ではない。一気に読ませる筋の流れのおもしろさは、迫力がある。日本の敗戦直前に、満州皇帝溥儀の所有する金塊を満銀の地下から日本に移送し、それを戦後の復興資金に充てようとする陸大四〇期の若手佐官グループを軸としている。実名でもかなり出てくるし、史実を踏んでいるので、実際にその歴史に立ち会ってきた体験に基づいているか、さもなければ相当な資料を手元に置いているかしなければ、これだけの素材は書き表せないだろう。大逆事件のち、満州へ渡り満州帝国で陰の帝王とされた甘粕も登場し、終戦時の行動として興味深く描かれている。溥儀の終戦時の様子や、毛沢東の八路军が延安から満州へ逃れて、逆にそこを拠点としてソ連とのつながりを深くして急激に勢力を拡大していく戦後史もよくわかる。また中国軍閥の存在や、日本がなぜ太平洋戦争へと突入していったか、何度も蒋介石軍との和解が成立しそうになりながら、そのつど関東軍や東條英機などによってつぶされ、アメリカとの開戦に自らを追い込んでいったか、日中戦争を通してよく振り返られている。この歴史をしつかり基盤としているリアリティは、生半可なものではない。また中国に残った日本軍人グループが、共産軍に敗れて台湾に逃れた蒋介石を助けて、多数参加し新たに日本軍式による軍の強化に乗り出す過程も、歴史の裏を掘り起こす生き生きとした迫真力を備えている。また逃避行の過程で結ばれる男女の絆も柔らかな感触を与えていて、ストーリーの牽引力となって読者を飽

ませる。この文章によって、人は大事なことを伝え、また伝えられていくと思う。

きさせない。主人公が妻を寝取られるその生身の感情も、軍人の行動の中で生きていく。あちこち話が拡大しながら全体として大きく流れていく、この強靱な構想力は明らかに長編のもので、今後どんな展開になるか大いに期待される作品である。ただタイトルは物足りない。もっとふさわしいタイトルがありそう。

●「小説芸術」(埼玉県) 47号

詩も高いレベルにあるこの雑誌は、独特な香りがある。野の百合といった、叙情性のようなものが流れている。

「別れ その日に」(津田崇)は、自殺をする友人とその別れを描いて、迫るものがある。「自殺はもうしない」と言いながら結局はまた繰り返して、向こう側へ旅立つ友を、人間の宿命感と諦念のうちにやるせなく見送る筆致は、胸を突いてくる。自殺をするために生まれてくる人間が確かにいる。それは弱さとも言えるし、業とも言えるし、まただれもが持つ必然的な影とも言える。それを傍らから引き止めることもできずにただ惜別を送る、半ば虚無的な、半ば叙情的な眼差しが、この文体の背後に魅惑的な楽音を奏でている。繰り返しの多い、同じ所をゆくり動くなめくじの跡のような執拗な光が、この叙情性を紡いでいる。「さようなら」という言葉が虚無と隣接する青春の響きとして深く落ちていく。最後のその顔が胸に焼き付けられる作品だ。

●「文芸中部」(愛知県) 79号

淡々とした装いの雑誌だが、その淡い色の中に深い味わいの作品があった。「おもかげ」(川口務)は、日中戦争の頃の青春の追憶としてこの作品を書いているが、少しも古さを感じさせない清新な輝きがある。虚弱な体の中学四年の主人公が療養のため生きた魚が豊富に揚がる暖かい岬の親戚の家に移り住む。病院で清潔で明るい看護婦の「やっちゃん」に注射してもらおううちに、心を寄せ合い親しくなっていく。「やっちゃん」の生き生きとした姿が初恋の世界を輝かせてい

く。一つ一つのシーンが心のときめきを匂わせてかけがえのない時を刻んでいく。やがて療養が終わり、その土地を離れなければならない。別れのシーンもよくある風景でありながら汽車の窓ガラス越しに掌を重ね合うなど美しい。その三ヶ月後に、突然「やっちゃん」は中国に看護婦として赴任し、父親が中国のスパイとして疑いをかけられ、永遠に自分の手の届かないところへ行ってしまう。ラストはもつと永訣の思いを高められた気もするが、その純愛の美しさは、時を超えるまぶしさを放って読者の胸に刻印される。中学・高校で肉体の体験をする者が多いという現代の乱れた性の中にこれを読むとき、いつそう清新な美しさが際立って感じられる。

●「渤海」(富山県) 59号

「風景—山の家—」(山口馨)は長い連作の一つである。一つ一つが独立しているが、作者の意図は風景や出会いや一つの品から一つの物語が生まれてつながっていく彷彿感にあるのかもしれない。その発想はいい。しかし今回の作品については着想はいいが、素材が複雑すぎた感じがある。その複雑な背景を会話の中の振り返りによって構成しようしているところに無理がある。家族や家庭の複雑さは、当人の内面にこそその本質があるのであって、事実だけを会話の中に並べてみても、内面の屈折には到達しない。内面の屈折に迫り、少しでも明らかに表に取り出すところに文学の作業があるのだから、この方法は、飛躍的な文章にならざるを得ない危険がある。実際、会話のやりとりの飛躍の妙に走ってしまっている。やや急いで書いた印象がある。「山の家」というサブタイトルにもしっかりと対象が感じられない。

山口氏がいまやるべきことは、全体の連作に一つの世界観なり、哲学を打ち建てることである。この「風景」とは何か。なぜ連作か。これらを繋ぐものは何か。ただ思いつきの連鎖では全体が脆弱になってしまう。何なるおそれがある。もう一度全体を振り返って、何

を造形しようとしているのか、何を表現したいのか、しっかりと問い直して見る必要がある。これは長編ではどうしてもやらねばならないことであり、連作のつながりだとしても、必然的に迫られる問題である。先へ行けばいくほどむずかしくなる。ぜひその壁を越えてもらいたい。それができればまた一段とい作品が立ってくるだろう。

●「安芸文学」(広島県) 75号

「安芸文学」は六十人近い同人を抱える大きな誌だが、巻末の「鉱脈探訪」に見られるように主宰の岩崎清一郎氏の高い見識と姿勢に支柱を得ている観がある。レベルは高い。またどの作品も書き出しがいい。いい指導者のもとで鍛え合っていることが感じられる。

●「雲の向こうのメモ」(梶川洋一郎)

爆六十二年を経た被爆者の人生を題材にしていて、感銘が深い。

「泥酔した人々のすぐ頭上に、街灯に焙り出されて枝が枝を張っている。その花弁のひとつひとつが、一瞬、銀色の光芒を放つ人の目に見えたのです。六十一年前、被爆死した十四万余の人たちが、黙ってジッと見おろしている。なにひとつ感情のこもらないその目に、私は戦慄を覚えたのです」——この導入から始まるストーリーは、元憲兵隊であった老人の日常として流れていく。将棋が強い主人公の修平は、将棋センターに通い、好敵手を得るが、その銀造という偏屈な老人との中が深まるにつれて、センターに集まる老人たちの沈黙のうちに潜んで封印されていたものが暴発する。被爆時、みな川に飛び込んで夥しい死体のなかで救いを求めていたとき、たまたま修平が舟を寄せた。舟の身動きがとれなくなるのを防いで、舟縁に手をかけて這い上がるようにする被爆者たちの手を修平が軍刀を振り上げて外し続けたという。それを成り行きから銀造が皆の前で大声で糾弾するはめになった。「おまえはピカが落ちた現場で、軍刀で被爆者を切りまくった奴だろが」「舟艇で軍刀を振り回したろが。わしやあ

の時の操舵手だ。見とったぞ」「こいつは無辜の民に軍刀を振り回した奴じゃ。そのうえ、大勢の被爆者を置き去りにして逃げた奴だ」

修平は興奮と動揺のなかから当時をまたありありと思いつき、さらに遺骨さえわからずに消えてしまった妻と子供のことを思い出す。風化によって真の問題が遠ざかり、安易さと安楽を求めて墮落する現代の風潮への批判を痛烈にこめつつ、悲劇への眼差しをもう一度強めていく。

優秀作であることは当然として、それ以上に多くの人に読んでほしい作品である。

「墓碑銘」(望月雅子)も自殺した江藤淳、田宮虎彦、原口統三をめぐって、深い哀惜に満ちた文章を織りなしている。その深くあたたかな掬い上げには、筆者自身の乳癌の重みと共鳴する旋律がある。たんに自殺としてそのまま片付けてしまいがちな我々の見方をもう一度人間の直視に立ち戻らせようとするぬくもりのある誘いは、陰の甘露に満ちている。

●今回はいい作品、いい文章が多かったように思う。いい文章は、読んで自分の内部が肥え太る実感が伴う。形だけではない物理的な豊かさが宿る。よく読めば同人雑誌の中には本物の文章がある。現今の商業文芸誌ではもうほとんどこれを得られない。この充実感をぜひたくさんの方と共有したい。その工夫をしていくことが、全国同人雑誌振興会と文芸思潮の大きな課題であると思う。

今季の優秀作は「繭の中」(森崎房枝)『文学街』253号(「こ」におる。「野見山潔子」『季刊午前』39号)、「雲の向こうのメモ」モリ」(梶川洋一郎)『安芸文学』75号。また準優秀作は「川湯温泉」(樽井英介)『文学岩見沢』76号、「水葬」永昇丸「沈没す」(斎藤澄子)『飛行船』3号、「桜忌降る」(竹内菊世)『飛行船』3号、「水面に浮かぶ月の光の破片。あるいは彷徨う舟」(玉田晃平)『千葉文学』3号、「別れ その日に」(津田崇)『小説芸術』47号、

「おもかげ」(川口務)『文芸中部』79号)としたい。ノンフィクションや随想はここには入っていない。また読めなかった同人誌のなかにも、いい作品があると思う。これだけに限ってしまうのは申し訳ない気がする。どうか全国同人雑誌振興会に推薦していただきたい。(全国同人雑誌振興会・選考委員/五十嵐勉)

●●●
●「渤海」56号編集後記より

「文学界」の同人誌評が今年一杯で終わる。これは同人誌の作家にとって大事件である。勿論、地元紙や図書関係新聞の評にも感謝しているが、文芸専門誌の評が幕を閉じるのは痛手である。大きな空洞ができたような気がしてならない。

「文学界」では担当の評論家の皆さんが丁寧に対応して下さっていた。同誌の評に取り上げられることは我々の目標の一つでもあった。その都度、雑誌発送後のそろそろと思われる号が待ち遠しく、いつも同人誌評のコーナーから頁を開いた。自作が賞賛されれば勿論嬉しく、辛口の評であっても幸福だった。作品名があっただけでも読んで頂けたことに感謝した。そうして一喜一憂しながら次作の奮起を誓えた。月のベスト5に選ばれば作品掲載の道も開かれていた。

だが、全国的に同人誌の数が半減していると言う。これが時代の流れということなのだろう。「同人誌」すなわち「老人誌」と陰口を叩かれ、実際にも新陳代謝は稀で、同人の平均年齢は毎年一歳ずつ確実に上がっている。ケータイやインターネットでも頻繁に小説が発表され、ブログの書き込みがベストセラーになる時代である。たった一冊の本でも印刷して貰えるようになった。

こういう時代に同人誌を出し続けて行こうとすると、いままで以上に強い決心が必要のようだ。「決心」という言い方が片意地を張っているように聞こえたら、「執着」と置き換えてもよいだろう。兎に角、文学のことを思い続けていく以外に道はないように思う。

●「北斗」550号編集後記より

同人雑誌は自分が書きたい作品を書く、が基本であり全である。「文学界」の「同人雑誌評」もなくならそうだから淋しくもあるけれど、誌面や紙面に取り上げられようがなかるうが気にする必要はサラサラない。全国の誰か一人か二人が読んでいて、これちょっと面白いな、と感じてくれれば十分ではないだろうか。その人が手紙を寄こそうが寄こすまいが、声を上げようが上げまいが関係ない。読んだ人の心に小さな波紋が投げかけられる、それで充分ではないか。少なくとも私はそう信じてやって来て後悔をした覚えがないばかりか、数々のびつくりするような出逢いに恵まれたものだ。本号に寄稿下さった方達の多彩さもまたその道筋の上のものだろう。

雑多な文芸、雑多な世界があつてこそ楽しいし、自分だけの宝物を探し出せる可能性も高まるのだろう。

